

ふるさとの民話 (第二十三話)

『こうがい池』

昔、飯川の変電所の近くに、小さい池がありました。その池には、粗末な橋が、一本架かっていました。

ある時、その池のそばを、一人の女が通りかかりました。女は、髪に美しい「こうがい」をさしていました



た。女は、橋の上に来て、池に映った自分の姿を、じっと見つめていました。髪にさした「こうがい」が、とても似合います。女は、その「こうがい」で、自分の髪を、ときあげてみました。

その時、過って、大切な「こうがい」を、池に落としてしまいました。さあ、たいへんです。その「こうがい」は、その女にとって、とても大切なものでした。女は、しばらく、思案していましたが、とうとう、その「こうがい」を取りに、池の中へ入って行きました。

ところが、その池は、どろ沼でした。池に入った女は、それっきり、あがってこなかったといいます。それ以来、その池は、『こうがい池』と呼ばれるようになりました。

戦後、耕地整理がされた時、その池は、なくなったということです。

(飯川町 橋元 従道氏の話)

→